

帰ってきた超音波

上妻志郎

東京大学産婦人科



[略歴]

昭和53年	3月	東京大学医学部医学科卒業
昭和53年	6月	東京大学医学部附属病院産婦人科研修医
昭和54年	9月	恩師財団母子愛育会愛育病院産婦人科医員
昭和56年	7月	東京大学医学部附属病院産婦人科文部教官助手
昭和57年	7月	長野赤十字病院産婦人科医員
平成3年	11月	国立病院医療センター産婦人科厚生技官
平成5年	8月	英国ロンドン大学ユニヴァーシティカレッジ産婦人科研究員
平成8年	6月	東京大学産婦人科学講座 文部科学教官講師
平成9年	10月	東京大学大学院医学系研究科生殖発達加齢医学 助教授
平成20年	12月	東京大学大学院医学系研究科生殖発達加齢医学 教授
		現在に至る

気持ちをわくわくさせてくれるものには、友人との久しぶりの待ち合わせ、素晴らしい本との出会い、待ちに待ったコンサートなど、日々の暮らしの中にも色々ありますが、一昔前には超音波検査に対してもわくわくするような思いを抱いたものでした。新しい装置で、あるいは新たなアイデアで、ああいう風にやってみたい、こういう結果が出るのではなからうか、という思いに駆られることが度々ありました。実際にやってみると必ずしもうまくいかないのですが、そういう場合でも、次にはこうすればよいのではないか、という別の考えが浮かびあがり、次の機会をわくわくした気持ちで待つのです。私が超音波検査をはじめたころは、電子スキャンを用いて産婦人科領域で何が見えるか、何を診断するかというのをひたすら追求した時代でした。胎児の身体のいろいろな部分をはじめて超音波でみてみるという幸福に恵まれていた時代であったので、わくわくしたのも当然でしょう。

わくわくするというのは、それまでの自分とは違う自分にさせてくれるようなイベントが目の前に迫っているときに感じるものなのでしょう。そのようにして10数年経過したころから、超音波検査に対しときめきを感じることはできなくなりました。それにはいくつかの理由が考えられます。経験年数が増えるのに伴って、超音波が世の中に広く普及し、様々な検討がやりつくされ、新たな発見の可能性が少なくなってきたのです。そうすると、超音波検査は単純作業の繰り返しになりがちで、molecular biologyなどの華々しい研究成果を横目で見ながらの苦行となってきます。新しい技術が開発されても、産婦人科では利用できないものであったり、利用できる可能性がある場合でも、デモンストレーションを制限する規則のため、装置を購入しない限り新技術に関して納得のいく研究をすることが困難となったりしたことも理由として挙げられるでしょう。さらに、大きな抑制効果をもたらしたのは倫理問題です。インフォームドコンセントは取ったのか？倫理委員会の承認を得たのか？と、言われることを考えると、産科というデリケートな領域では気軽に試してみることができにくくなりました。

喜ばしいことに、わくわくする感じ、超音波検査をやりたい気持ちが数年前に戻ってきました。3D超音波や組織弾性評価法などの新技術は、産婦人科領域でも利用できる可能性を有するものであり、色々なことに挑戦してみたいととてもわくわくしているのです。装置の購入に関しても、大学の独立行政法人化に伴い病院の収益を上げる必要が出てくる反面、収益を上げれば装置を購入できる可能性も出てきたのであり、希望の光が見えています。さらに、倫理の問題は当然越えなければならないハードルであると認識されるようになってきました。私が超音波をはじめたころは、日本の産婦人科領域の超音波診断は、おそらく世界の最先端を走っていたのではないかと思います。それを科学的にまとめ、きちんと世界に向けて公表してこなかっ

た点は、残念であります。日本では当然と思われるようなことが、後に海外で発表され歴史に残るようになったものも少なくないと思います。面倒ではあっても、計画的に研究を行い、科学的な立場で検証することが必要であるということを肝に銘ずる必要があります。

わくわく感を持っていると、何をやるにしても楽しさが増してくるのですが、若手医師の皆さんはどうなのでしょう。私の若い頃は、超音波について覚えたり、学んだりすることはあまり必要でなく、とにかくやってみて、見えたものをどの様に表現するかを考える時代でした。今は、やらなければならないこと、覚えなければいけないことが多いので、臨床上の必要性が明らかでないことに対して、わくわくしながらやってみる、という余裕がなくなっているのかもしれませんが。診断結果に対する責任も以前とは格段の差があります。そのような点から、何がわかっていて、何がわからないのか、ここまで見ておけばよいということをしっ
かり決めること、それと同時に、新しいことに挑戦していく楽しさを若い人に伝えていくことが大切であると考えています。

新しいことでなくても、実は一例一例の診断の中に、楽しさは含まれています。超音波診断を行う場合には、頭の中で「ああでもない、こうでもない」と仮説と検証を繰り返すことにより正しい診断に徐々に近づいていくのであって、そのような作業は臨床を行ううえでの楽しみの源泉であると思います。その問いかけは、検査が終了したら消えてなくなるのではなくて、頭の中に何らかの痕跡を残し、さらに結果からのフィードバックが加わることにより、徐々に診断能力が上がってきます。自分を変化させることができるのです。超音波は診断を通して人間の脳を鍛える装置であるということができるとは思っています。